

(2012 年度山西大学奨学生レポート)

## 2012 年度山西大学奨学生派遣「最終レポート」

芦田 彩希

あれだけ長く感じた冬休みが明けて後期の授業が始まると、およそ 10 か月の留学生活があつという間に終わってしまいました。日本の大学では保健医療福祉学部には所属している私にとっては、周りに留学している人も少なければ留学する機会もなかなかありませんでした。そんな時に目に入ってきたのがこの埼玉県の奨学生派遣事業を紹介する学内メールでした。申し込む当時は、山西省なんて聞いたことがない、どのようなところなのか全く見当もつきませんでした。こんなにもいい機会はないと迷わず応募しました。締め切りまで時間が少ない中、周りの方々にサポートしていただき、山西大学に行くことが決まりました。この一年で感じたこと、心に残ったことを報告したいと思います。

私は周囲の方に恵まれていたと思います。所属している日本の大学には以前埼玉県庁の国際課にいて山西省に行ったことがある事務局職員の方や、山西医科大学からの留学生がおり、実際の太原の様子を教えていただいたり、交流する機会がありました。しかし、私は全く中国語を知らなかったので、地元の長瀨町を案内する際に直接教えることが何一つできず、悔しい思いをしました。しかし、埼玉県親善大使として留学することになったので太原に出発する前に私が住んでいる役場や観光案内所で中国語のパンフレットを集め、中国語がわからないなりに知ってもらおうと準備しました。

私たちが派遣された 2012 年度は中国内で大きな出来事があった年だと思いません。留学が開始した 9 月に日中間で尖閣諸島の問題が起き、日本人留学生は外出禁止になりました。日本にいる友人からも日々心配のメールが送られてきました。しかし、私自身あまり日常に変化を感じることはなく、その頃一緒に食事に行った中国人の友人にはこの問題は政府間の問題で私たちは友達だと思っているよと言ってくれ、ご馳走してくれたり、私たちが行ったことのない太原の観光地にも連れて行ってくれました。日本にいるとマスコミからマイナスな印象を受けるニュースを見かけることが多い気がしますが、太原で生活していると人柄の温かさに何度も助けられました。

この留学中に、私は太原以外に北京、上海、蘇州、平遥、大同に訪れました。中国で面白いと思ったことは、違う都市に行くと違う国に来たような感覚になることです。一時帰国した際に、北京の民宿のような所に宿泊しました。一部屋に 6 人ほどいて、自分のスペースはベッドの上のみ、台所、シャワー、トイレ

レは共用でした。中国の学生寮は一部屋6人から8人までの大人数で暮らしているの、中国の学生はこのような生活をしているのだなと思いました。中国で宿泊施設を予約する際は、外国人禁止の施設もあるため事前に自分が日本人であることを伝えておきました。すると、以前も日本人が泊まったことがあるよと快く許可をもらうことができました。同じ部屋の方たちは私が留学生だと知ると積極的に話しかけてくれ、まだまだ至らない私の中国語をほめてくれました。空港までどのように行けばよいかわからなかった私をわざわざバス停まで連れて行ってくれたことはとても嬉しかったです。よかったこともあれば、嫌な思いをしたこともあり、王府井の屋台で軽食を買ったところ、一盒(一箱)20元と書いてありましたが、私が外国人だと知ると一つ20円で8個あるから160元と言われてしまいました。その時にすでに100元渡していたので返してくれず、自分の言葉ではどのように言えばいいかもわからず泣く泣くお金を払いました。今回の出来事をきっかけに、もうこんなことが起きないように中国語を学ぶ意欲が高まりました。北京も上海も中国を代表する大都市ですが雰囲気は全く違いました。北京は中国の昔ながらの町並みがあらゆる所にありますが、上海は外国に来たような洋風な建物が多く、たくさんの外国人向けのスーパーがあります。ふらっと立ち寄ったカフェには店員、お客さん全員が外国の方で注文するのに戸惑うこともありました。上海で働いている日本の方と会う機会があり、上海は日本人が最も多い外国の都市なのだと聞きました。確かに注意してみれば地下鉄でもお店の中でも日本人を見かけることが多々ありました。

5月下旬にこの奨学金で来ている留学生たちと一緒に大同へ行く機会がありました。移動する際にバスから、道端に土葬してあるところを何度も見かけ、建物もほかの地域と全く異なり、まるで昔に戻ったような不思議な気分になりました。太原の現在の市長は以前大同にいたのですが、たくさんの建物が取り壊され再建途中でした。新しく建てられた建物はとてもきれいでどこか川越のような雰囲気があり、日本の留学生たちで懐かしい気持ちになったことを覚えています。太原も5月ごろからたくさんの建物が壊され、移動にもとても不便を感じましたが、大同の再建されている様子を実際見てから、どんどん発展していく太原を楽しみに思いました。

中国はとても広く方言がたくさんあり、もちろん太原にもあります。初めの半年間は、簡単な会話しかできず、周りの中国人の会話を聞く余裕はありませんでしたが、タクシーの運転手と会話してみると全く聞き取れないことがあり、学校の先生とは話し方が違うなどだんだん気づいてきました。中国に来るまでは台湾人の母が話す中国語は一般的な中国語だと思っていました。しかし、スカイプで電話したときに、台湾や南の地方の話し方特有の発音だとわかりました。また、何度か運転手に南方人(南の地方の人)が聞かれることがありました。

友人に聞いた話によると南方人はそり舌発音が苦手だそうです。きっと日本人の私は見た目の区別がつかなくても、そういった部分の発音によって違う地方の人だと思われたのだと思います。自分の耳でもそういった聞き分けができるようになると、自分の上達を感じられうれしくなったのを覚えています。

留学が終わり、私はイタリアのクラスメイトの家に遊びに行きました。街中を見渡すと中国人の観光客、中国人が経営しているお店がとても多いことに驚きました。そのおかげでお土産屋でも中国語で色々な質問をしたり、地下鉄を利用する際に困っていた中国人を手助けすることができました。日本に帰ってきてからも中国人のコミュニティの広さに改めて気づいたのと同時に、自分次第でいくらでも中国語を使う機会があることにわくわくしてきました。地元の駅で中国語が耳に入ってきたので、そちらの方を見てみると台湾と書かれたTシャツを着ている男性が切符売り場で戸惑っていたので、つい話しかけてしまいました。普段は人見知りで人に話しかけることが苦手な私ですが、中国語が聞こえてくるとつい好奇心で動いてしまうことがあります。些細な手助けでも感謝されると嬉しい気分になりました。母は私が中国語を学習することに協力的で、日常会話も意識的に中国語を使うようになりました。日本を離れてみて、外国の方々が私よりも日本に詳しい事があり、日本についてまだまだ知らないことばかりで、改めて自分で日本のこのようなところが素敵だなと気づくこともできました。行ったことのない国に行きたいと常に思っていました、まず日本をもっと知っていこうと思います。

今はまだ将来どのような仕事をするかは定まっておらず、むしろこの留学を終えて、もっといろんな選択肢を探してみようと思うようになりました。中国語を学習したこと以外にも、同じ日本からの留学生、他の国の留学生から自分にはなかった考えや話を聞くことができたのもいい経験になりました。今は大学も夏休み中なので、この時間を利用してHSKのさらに上の級に挑戦することに決めました。留学中には、作文の問題を山西大学の先生が丁寧に添削をしてくださりとても感謝しています。帰国前に先生方や中国の友人たちはまた中国に来たら連絡してね、うちに泊まってもいいのだよとまで言ってくれ、人と人とのつながりをこんなに大切にしていることに感動しました。また機会があれば、自分の目でまだ見たことのない中国を見て、いつかまた発展した太原を見に行きたいです。振り返ってみると、自分なりに精いっぱいだった留学生活でしたが、自分のダメな点、まだまだ伸ばせる面に気づくことができ、見つめなおすきっかけになりました。このような貴重な機会をくださった埼玉県の皆様、たくさんの手助けをくださった中国の友人、支えてくれた家族や友人には感謝しています。ありがとうございました。

・へとへとになりながらも登り切った呼延村の頂上



